地方志向の若者が増え、地方が注目される一方、集落では、人口減と高齢化による地域コミュニティ機能の低下が課題となっています。

このため市では、移住やUターンを促進し、新たな視点で集落の活力向上を図ります。今回の特集では、空き家活用や移住者受入れを考える契機となるよう、地方の魅力、移住者と集落のまちづくり事例、市の施策等を紹介します。

特集 移住定住

“移り住みたい人”が選ぶ
“住み続けたいまち”へ

「月刊ソトコト」編集長に聞く 地方の魅力

いま、なぜ地方なのか。地方としての長浜の魅力は―

雑誌編集を通じ、都市から見た地方の魅力を熟知する指出一正さんに、長浜の可能性をうかがいました。

指出一正さん
1969年群馬県生まれ。上智大学法学部国際関係法学科卒業。雑誌『Outdoor』編集部、『Rod and Reel』編集長を経て、現『ソトコト』編集長。雑誌作りだけでなく、取材で培った経験から島根県、広島県を始め、全国のまちづくりのアドバイザーとして活躍。

■都会の若者を中心に地方に対する意識が変わったのはなぜですか

２つの出来事が大きく変えたと考えられます。それは、２００８年のリーマンショックと２０１１年の東日本大震災です。これまでは、いい家に住んだり、いい車に乗ったり、お金でモノを消費する満足感に価値を見出してきましたが、この２つの出来事により、右肩上がりの経済に不安を感じたり、お金があってもモノが買えない経験をしました。このことで、お金を払って買えるモノの価値観の上限が見え、消費価値が必ずしも自分の幸せにつながらないことに気づいたのだと思います。これに代わって、人と人とのつながりやコミュニティ、人の温かさ、さらに、農業体験や古民家のリノベーションに参加するなど、形あるものにではなく、暮らしに密着した「体験」「経験」という形のない「もの」に価値を見出してきています。

こういうことができるフィールドは、都会ではなく地方だということになり、地方に関わることに面白みを感じているのです。

また、都会の若者がこういった関わりの中から、自分のやりたいことや未来を考えるとき、ダイレクトに自分の活躍が表現できる場としては、埋もれる都会ではなく、地方であるということになります。

■都会の若者は、どういう地方に魅力を感じていますか

癖のないまちよりは個性あるまちを選択しますね。住んでいる「ひと」や「活動」に個性があるまちです。「おいしい特産品」・「素敵な風景」＝魅力とはならなくなっています。まちに「遊び心」があり、そこに住んでいるキーパーソンを中心に同じ思いを持つ仲間が、いかにワクワクするような活動をし、そこに自分が関わると楽しいかを見ています。

ある地方では、空き家の所有者や地域の人が若者に、「タダで好きに使ってくれてええよ」と言ってくれて、自分たちの思いを実現することができたそうです。これは都会ではありえないことで、地方ならではのファンタジーなのです。これを許してくれる大人たちがいる、つまり若者の活動を温かく見守ってくれる地域が魅力ある地域なのです。

■指出さんから見た長浜の魅力は

ズバリ、「水辺のまち長浜」です。全国的にも、住民・企業・行政が、水辺で社会的なムーブメントを起こしていこうと、「ミズベリング」というプロジェクトを行うなど、急速に水辺人気が高まっています。

水辺は、水面の揺らぎを眺めてリラックスすることで、ワクワク感や創造力が掻き立てられ、クリエイティブな活動ができる場としても期待されています。実際、全米で環境都市ＮＯ.１のアメリカ・オレゴン州ポートランドでは、水辺を活かしたまちづくりにクリエイティブな人がたくさん集まってきており、世界的に注目されています。

長浜は、雄大なびわ湖や「鏡湖」といわれる余呉湖、周りの山々から流れる清らかな川からなる様々な水辺空間が存在します。最近では、まちなかを潤す米川の水辺で展開するシェアスペース、湖北の暮らし案内所「どんどん」は、若者を中心にたくさんの人が集まり、新たなつながりや価値観が生まれる場として、都会の人から見ても非常に魅力的に映ります。こういった水辺を生かした場がたくさん生まれることで、まちはさらに魅力的になると思います。

月間「ソトコト」
「ソーシャル」をテーマに、人とつながり、コミュニティを楽しく変えていく新しい暮らし方や働き方を紹介する雑誌。８月号は、水辺のまちづくりを特集され、米川のほとりの湖北の暮らし案内所「どんどん」が表紙を飾りました。

■移住者とうまくやれるか不安を感じる地域が多いと思いますが

もちろん誰しも不安に感じることだと思います。でも、地方に移住したい若者は、地方に対する価値観として、ひっそり余生を過ごしたいのではなく、地方だからできる人のつながり、コミュニティなど地域に関わりながら、社会をよくするためにみんなで考える時間を大切にしたいと思っています。ですから、あまり構えずに、自分の息子や娘のように仲間として接してあげるのがいいと思います。

指出編集長も参加した「ソーシャルなまちづくりシンポジウム」(2016.3.1)